
七夕祭り

桜桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七夕祭り

【Nコード】

N0304N

【作者名】

桜桃

【あらすじ】

北海道は8月7日が七夕という事で、かかせていただきました小学生、中学生、高校生（幼）高校生（恋）夫婦。というかんじでいかせていただきます。読んでくれたらうれしいです。感想&評価もまっています。

叶えたい夢

「じゃあ、皆さんかいてくださいね」

せんせいにたんざくをわたされて、
私はまっさきに、かなえたいゆめを書こうと
えんぴつをもった。

「えっと・・・」

「こんなんではたらいくらでも書いてやるっつーの。」

はなの上にえんぴつをはさんでいる新一。

「そんなことないもん！おねがいはかなうよ！」

「かなわねえよ！」

「かなうもん！」

「じゃあ、お前のかねえたいゆめってなんだよ。」

「ひみっー！」

「けち。」

「けちじゃないもん！」

「へいへい。」

新一のばか！

ひっしにおねがいすれば、ぜったいかなうって

新一のお母さんがいつてくれたもん！

ぜったいかなうもん！

く毛利家く

やっぱり、かなわないのかな・・・

かみさまは私のおねがいきいてくれなかったのかな・・・

新一のいうとおりだった。

ひっしにおねがいしても、かなわないんだ・・・

ピンポン

「はあい・・・」

かちや

「久しぶり。蘭。」

「お母さん？お母さん！！！！」

やっぱりかなった！

「ごめんね。蘭。」

「うっん！きてくれてうれしいよ！お母さん！！」

あした、新一にいわなきゃ！

帰ってきたって！

わたしは、寝るとき、こんなことを考えていた。

あさおきたときには、

お母さんはもう、いなかった

叶えたい夢（後書き）

変な終わり方ではないです．．．

次はがんばりますので！！

桜桃

また、来年も。

ピンポン。

「蘭ちゃん。いらっしやーい！」

「呼んでいただき、ありがとうございます。」

「いいのよ！未来の娘だもの！」

「え！？」

「おい、母さん。蘭に変なこと吹き込むなよ。」

「変なつて・・・失礼ね！ささ、蘭ちゃん。あがつて〜」

「はい。」

「今日、なんで蘭ちゃんを呼んだかというと・・・」

じゃーん!」

有希子は短冊を出した。

「あー七夕!」

「そうよ。お願いごと書いて」

「あほくさ。」

「ありがとうございます!」

めんどくさそうな新一とは別に、蘭は笑顔で短冊を受け取った。

「ほら、新ちゃんも!」

「はあ。」

ため息をつき、短冊をもらう。

「えっと……」

新一がふと、蘭を見ると、

”お父さんとお母さんが仲直りしますように。”

小学校のころとまったく同じことがかかれていた。

蘭の願いは、小学校の頃からこればかり。

「さあ、終わったら飾って！ごちそうを食べてみましょう。」

「はい。」

「あゝい。」

くPM8:30く

「今日はありがとうございました。」

「いいのよ。蘭ちゃんならいつでも大歓迎!!」

「新一、ちゃんと送るんだぞ。」

「わぁってるって。」

「変なことしちゃだめよん?」

「だれがするか!!」

新一は蘭を送るため、工藤家を出た。

「新ちゃんと蘭ちゃん、どんなこと書いたんだろう。」

「蘭君は想像がつくが・・・」

「ええ。お母さんが戻ってきますように。よね、去年もそうだった。ほら、やっぱり。」

蘭の書いた短冊を優作に見せる。

「あら。」

「どうした？」

「裏にこんなことが書いてあったわ。」

”いつまでも、新一と一緒にいられますように。”

「ふふつ。お願いしなくても叶うのに・・・」

「そうだな。」

「えーと新ちゃんは・・・」

”父さんを超えて、ホームズのような探偵になる。”

「これじゃあ、お願いというよりも・・・」

「目標だな。」

「新ちゃん、七夕をどっか取り違えてないかしら。」

「有希子。」

「え？」

「裏を見てみなさい。」

” 一生蘭を守る。”

「あら、プロポーズ。」

「やるな。」

「いつか、勇気をだして言えるときがくるかしら。」

「くるさ。あいつなら。」

遠い遠い未来を優作と有希子は想像していた。

新一が帰ってくるまで

あと、3分。

君の笑顔

「はい。コナン君。」

「わあい。ありがとう!」

（こんなに願が叶うならいくらでも書くて・・・）

内心、こんなことを思っているコナン。

「みんなも書いてね。」

「「「はい!」「」」

「工藤君の願い事は愛しの彼女とラブラブデート。かしら?」

「おい。」

「ラブラブ・・・デートですか?」

「コナン君、誰とデートするのぉ!？」

「なんのデザートだ？」

「元太君、デートですよ!デ・エ・ト!つまり、
ある女の子とお出かけするんですよ!コナン君は。」

「なにぃ!？」

「するわけねえだろ!！」

「ほんとかしら。」

「ほんとだ。」

コナンと哀の会話に蘭は、?マーク。

「蘭お姉さん、今日はありがとう!」

「お料理、とってもおいしかったです。」

「また来るぜ!」

「ありがとう。みんな。気をつけて帰るのよ!」

「「「はい!」」」

少年探偵団を、まるで我が子のように微笑む蘭。

「ふふつ。」

「どうかしたの? 蘭姉ちゃん。」

「ちょっとね・・・新一のこと思い出しちゃった。」

「新一兄ちゃんのこと?」

「うん。小学校三年生のときね、織姫と彦星はちゃんと会えたのかなあ？」

って言ったの。したら、未だにそんなの信じてんのかよ。ってバカにされたのよ？」

はらたつわよねえ。

と苦笑交じりにコナンに言う。

「でもね、織姫と彦星の折り紙を折ってくれてね、ちゃんと会えたぜ。って、顔を真っ赤にさせて、私にくれたの。」

「ら、蘭姉ちゃんは嬉しかった？」

「うん。勿論よ。今でもとっておいてあるんだから。」

「え？」

「あ、これは、新一に内緒ね。」

人差し指を唇に押し当てる。

コナンは真っ赤になりながら、頷いた。

「えっと・・・元太君はうな重を腹いっぱい食う。
クスクス。元太君らしいね。」

歩美ちゃんは、コナン君のお嫁さん。
あら、よかったわね、コナン君。」

あははと笑いながらもコナンの顔は引きつっている。

「光彦君は、コナン君を超える。だって、
強力なライバルが出現だね。」

「は、ははは・・・」

「哀ちゃんは、名探偵さんの幸福と悲劇。
なんだろう?」

灰原のやろ・・・

つと内心毒づく。

「哀ちゃんってよくわからないなあ。
ねえ、どんな子なんだろう?
もっと、哀ちゃんと仲良くしたいんだ。」

「例えると、未知の世界。謎につつまれている、素顔は、宇宙のように幅広い。」

逆らったらなにされるかわかりやしねえ。

実験台か？

あいつ、平気で恐ろしいこと言っし・・・

つとぼそつと言う。

「コ、コナン君？」

「って、自分で言ってたよ！灰原が！」

「そ、そうなんだ・・・」

「う、うん！」

「コナン君は、なんて書いたの？」

「な、内緒！！」

「えゝ。ダメ？」

蘭のダメ？に一瞬クラっとなりそうになりながらも

ダメといい、そっぽ向く。

「残念。」

蘭は台所へ。

”元に戻っても蘭の笑顔が隣にありますように。”

君の笑顔（後書き）

こんなの蘭に見られたら、
一瞬ではれてしまいますよね。
あははは・・・

桜桃

居場所

「ただいまあ。」

工藤邸の住人が帰ってくる。

「おかえり。新一！」

居間に入ると、彼女は、あるものを作っていた。

「笹？」

「そうなの。今日、七夕でしょ？」

「え、そうなの？」

「そうなのって・・・あんだ、忘れてたの？」

「ああ。」

「まったく。はい。お願い事！」

「高3になって願いごとって・・・」

「はい！」

「へーい・・・」

しびしび受け取る。

「つたく、コナン君のときはあんなに喜んでたのに。」

「コナンの時とはちがうんだよ！」

「そうなの？」

「そうなの。」

「できた〜！」

「俺も。」

「新一、見せて！」

「蘭が見せてくれたらいいぜ。」

「えー、いやだよお。」

「じゃあ、俺も。」

「見せてくれたっていいじゃない!」

「お前が見せてくれたらいいって。」

「へるもんじゃないでしょ?」

「お前、言ってることめっちゃくちゃ。」

まあ、とにかく、蘭が見せてくれたら見せる。」

「~~~~」

「腹減った。飯食おうぜ。飯。」

「もー。」

2人は、楽しく話しながらも、お互いのお願ひ事が気になっていた。

” 蘭が俺の傍にいますように。 蘭がいる居場所が俺のいるべき居場所。”

” 新一と一緒にいられますように。 新一の居場所が私の居場所でありますように。”

同じような内容であった・・・

もう……………。

「おかーさん！」

「なあに？」

「愛莉ねえ、おねがいごとかいたのお！」

「よかつたわねえ。」

「かあさん、とうさんは？」

「事件よ、事件。もうちょっとまってね。」

「はい……………」

つまんない。

と口を滑らす。

つたく、あのおおばか推理のすけ〜！！！！

半分怒りの蘭。

「ただいま。」

「「おとーさん!!」」

「な、なんだ!？」

「七夕だよ!!」

「ねがいごとかねえてもらうんだ!」

「ちがよう! おりひめさまとひこぼしさまがあつ日なんだよ!」

「どっちでもいいじゃねえか!」

「よくない!」

小さい頃の新一と蘭に似ている。二人。

「はいはい。2人は何を書いたんだ?」

笑いながら2人を居間へ。

「おれは、とうさんをこえるたんていになる!」

「愛莉は、おかあさんみたいにつよくなるってかいた!」

「湖南は昔の俺とまったく同じ事書いてるな。
愛莉、お前ならできるぞ！」

「うん！」

「とうさんもおなじことかいたの？」

「ああ。父さんを超える。ってな。」

「へえ。」

「3人とも！ご飯いらないのおく？」

「「いるー！！」」

蘭の声がするほうへ、
2人は掛けていく。
新一も2人のあとにつづいた。

「おかえりなさい。新一。」

「ただいま。」

夜

「湖南は新一に似て、愛莉は私に似てて・・・
男の子は母親に似てるって聞いてたんだけど？」

「俺だって女の子は父親に似るって聞いたぜ？」

「おかしいわね。」

「ああ。容姿、性格、趣味、全部、湖南は俺、愛莉は蘭に
そっくりそのまま似てるんだもんな。」

「あーあ。湖南もおおばか推理の介になっちゃうのか。」

「おい。」

「ちがった？じゃあ、推理オタク？」

「そういう問題じゃねえだろ。」

「じゅめんじゅめん。」

2人は子供の寝顔を見る。

「幸せだな・・・」

「ああ。」

「新一の願い事は？」

「・・・もう、叶った。」

「え？」

「高校3年のときに、もう、叶ってる。
お前を手に入れるって。」

「新・・・」

「それが、小さい頃からの変わらぬ願い。」

「・・・私も、私も、ずっと新一といたっていつお願い。
叶ったよ。」

二つの陰は、

重
な
っ
た

もう・・・・・・・・。（後書き）

七夕祭り。

完結です！！

空想話にお付き合いいただき、
ありがとうございます。

これから、私の家でも、
七夕祭りが始まるうとしています。

北海道の人にとって、
いい日でありますよう、
心から願っています。
勿論、他県の人たちも。

これからも、よろしく願いします。

平成22年 8月7日

桜桃

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0304n/>

七夕祭り

2010年10月10日20時25分発行